

第3回 品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 会議録（要旨）

日 時：令和元年8月19日（月）14時～15時30分

会 場：品川区役所第2庁舎 261 会議室

出席者： ◎委員長、○副委員長

委員	(出席委員) 本城善之委員◎、島田貴司委員○、豊岡耕一郎委員、平嶋悦子委員、巻島淳子委員、仁平品川保健センター所長、蜂屋戸越台中学校長、丸山八潮わかば幼稚園長、石井保育教育担当係長（代理出席）、 大関教育総合支援センター長（オブザーバー） (欠席者) 廣田子ども育成課長、守田源氏前小学校長
事務局	横山品川図書館長、邑橋事業担当係長、渡辺事業担当係長、菴原事業担当主査、小田桐主任主事、門脇主事、林主事、比嘉主事、青木指導主事

傍聴者：2名

1. 委員長挨拶
2. 第二回の振り返り
3. アンケート調査の中間報告
4. ワークショップの報告
5. 有識者へのヒヤリングの中間報告
6. 計画（案）について

<主な意見>

委員：小・中・高校生と上がるにつれて読書をしなくなる傾向は気になっていた。読書をしない理由として、本を読むことが苦手だからという子どもが2割近くいる理由を考えないといけない。読書に対する興味と読書能力を交差させながら学年が上がっていくと思うのだが、現在、教科書を読めない子どもがいること

が問題になっている。そういった子どもにどうやって文章を読み込ませるかが問題だ。

委員：高校の学習指導要領では「探求」という科目が追加された。そこでは自分の意見を発言することまで求められており、文章を読み込むこととともに、発言することも視野に入れられるとよいと思う。

委員：文章を読み込むためには、小さい頃から本を読み、読んだことを共有して、積み上げるしかない。高校生になって突然文章が読めるようになることはない。未就学児から積み重ねることを計画でも取り上げてもらいたい。そのためには、家庭や図書館、学校だけでなく、地域の様々な手を借りることを考えないといけない。

委員：読書習慣を新たに定義したことで計画の幅が広がる。読書の楽しさとともに、「知る」ためのスキルを身につけることを取組方針に加える点もよい。ただ、ヒヤリングで発言のあったような調べ学習におけるプロセスを評価することは学校現場では難しい。必要だとは思いますが、教員の力量も必要であり、時間的な問題もある。また、調べ学習についてはそもそも学校図書館の資料が古いという問題があり、その点から考える必要がある。

委員：「知る」ためのスキルのために、子どもが書き手になることが有用であるということは理解でき、重視するべきだと思う。

委員：ワークショップの報告で、読み続ける根気がないことが本を読まない理由に挙げられていた。小学校での読書活動で、読んだ本の冊数を評価する取組を見たことがある。量で評価すると、子どもたちは薄い本をたくさん読んで評価を得ようとする。それを否定するつもりはないが、1冊の本をじっくり読んでいることを評価する必要もあると思った。

委員：中学生・高校生の読書量を増やすためには、その年代の子どもに働きかけるだけでなく、乳幼児期の家庭への働きかけが重要だと思う。子どもが楽しむことができる本を選ぶ力が必要だと思う。ちょうどいい本に出会えたときは本を読む。発達段階に合わない本に出会うと離れてしまう。また、小学校でも読み聞かせの体験があるとよいと思った。

委員：レファレンスの強化が必要なのではないか。読まない子どもも、自分の興味のあることについては追求していく力はあるので、それを引き出してくれる人が大事だと思う。図書館の担当がいて、気軽に声をかけられるという環境が必要だと思う。

委員：よい本とその子に適した本は違う。後者は適書というが、それをやらなければいけない。司書だけでなく、家庭の方や園の方たち、子どもの周囲にいる方が適所を薦めていかないといけないのだろうと思う

委員：アンケート調査で、子どもたちの多くが本を読むことが嫌いではないことが分

かって安心している。ただ、一定の年齢になると本を読まなくなる。ワークショップでは読書がかっこよくないという意見もあったが、スターバックスで本を読んだり、パソコンで作業している大人をみると、そうでもないように思う。

委員：学校図書館のあり方も従来の考え方から飛び出して、活字以外のメディアの活用も含めて、両方とも活用できるようにした方がいいと思う。ワークショップでは、マンガをきっかけに読書に誘導するなど、いろいろとアイデアが出ている。映画からコミック、そしてノベライズへと促すこともあり得ると思うので、発想の転換が必要だと感じた。

委員：ワークショップでのアイデアには興味を惹かれる。音楽や映像から興味がつながるということが分かった。ひとつのきっかけとしてよさそうである。

委員：ティーンズプラザでは中高生向けの事業を行い、子どもにとって訪れやすい環境をつくっている。図書館でもできるか分からないが、中高生にとって環境整備を考えることができれば中高生も図書館を利用してみたいと思うのではないか。

委員：学校種別の対象ごとに「知る」ためのスキルに関する目標が書かれているが、未就学児に対して何も書かれていない。未就学児においても「知る」ためのスキルは育まれるはずなので、書き込んでもらいたい。

事務局：未就学児の「知る」ためのスキルについては、検討の上、記載したい。「幼稚園教育要領」等で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を参考にすべきか。

委員：各要領や保育指針には各内容の狙いが書かれているので、それを参考するとよいと思う。

委員：具体的には、子どもたちが何かに関心を持ったときに、幼稚園教諭や保育士が図鑑などを用いて、関心を深めたり、広げたりすることを促す。今回の指導要領で示された資質・能力は、未就学児から高校に至るまで縦断的に設計されているので、その点も踏まえられるとよいと思う。

委員：読むことに困難さのある子どもに配慮して計画で触れることはよいが、配慮しているというポーズだけでなく、困難さに手が届くよう、より具体的になるといい。

委員：読むことに困難さがある子どもについては、リーディングトラッカーを導入してはどうか。購入してもよいが、自分で工作的につくれるようにするとよいのではないか。また、リーディングトラッカーの存在自体を広めることも必要だと思う。

委員：読み込むための取り組みについては、自主的に本を読むための手法である読書のアニメーションが挙げられる。公共図書館でも積極的に取り組んでいる例もあるので、取り入れてはいかがか。また、語りも有効だと思う。文字のないとこ

ろで話すことで想像力が育まれる。絵がなくても情景が思い浮かべられるようになる。段階を踏めるとよいと思う。

委員：読書が好きな子どもが比較的多いということが印象的だった。そのなかで計画として不読率の改善ではない目標と目的を設定することは大切だと思う。

委員：読書能力と読書興味という2つの視点を明確に意識することが大切だと思う。狭い意味での教育的観点では能力に比重を置きがちなのだが、読書能力と読書興味はらせん状に回せないといけないのだろうと思う。

委員：ブックファースト活動はされているのか。その際に、保護者に子どもの読書活動に対するアドバイスを行うようなケースはあるのか。誰もが関わる機会で宣伝することは有効だと思う。

事務局：4か月健診の際に本の引換券を配布し、図書館で本と交換している。健診をきっかけに図書館に来るのもよいと思う。本の読み聞かせ方や選び方を伝えていくことは手が回っておらず、課題だと考えている。

委員：読み聞かせの方法に関するレクチャーに取り組んでいる児童センターもある。児童センターは本に関心のない方も来館されるので、図書館と連携して、機会を活かせればよいと思う。

委員：対象の名称が「高校生」、「大学生」という言葉を用いているが、高校・大学に通っていない子どももいる。そのような子どもたちに対する配慮をした名称を使えるとよいと思う。

事務局：たとえば「高校生世代」、「大学生世代」などを検討し、次回の資料では反映させたい。

事務連絡

今回は9月18日(水)に開催予定です。

以上